見る 知る 歩く
ジオなまち
ながのはら

vol.29

戦争と入植の記憶を次世代へ

満蒙開拓と北軽井沢

［ 群馬満蒙拓魂之塔 ］

北軽井沢を代表する青々としたレタス畑に酪農の風景。
これらはわずか70数年前、
戦争ですべてを失ってこの地に辿りついた人々が、
荒地をいちから切り拓き、作り上げたものです。
今回は北軽井沢の歴史と切っても切り離すことのできない、
満蒙開拓とその後の歴史について振り返ります。

昭和49年に建立された「群馬満蒙拓魂之塔」。その前年に中国より帰還した群馬県送出の身元不明の14柱を含む全物故者を慰霊供養するために建てられた。

02

01

01.「拓魂之塔」の隣、公民館のある広場には、大屋原の人々により建立された地蔵尊や供養塔などが並ぶ。三又に別れた大きな赤松は、開拓に尽力した3名（清水圭太郎、下田栄太郎、真下学太郎）にちなみ「三太郎松」と呼ばれている。 02.昭和51年に作られた大屋原開拓30周年の記念碑。裏面には開拓の経過などが刻まれている。 03.昭和26年建立の「開拓地蔵尊」。 04.「就農組合本部」跡に建てられた公民館内部には、清水圭太郎氏をはじめ開拓関係者の写真が飾られている。 05.国道146号沿いに建つ甘楽地区の「満州開拓記念碑」。

05

04

03

希望を夢見た満州開拓と敗戦後の悲劇。

北軽井沢大屋原地区。レタスやトウモロコシなどの高原野菜の畑に囲まれた木立のなかに、レンガ造りの塔がひっそりと佇んでいます。この「群馬満蒙拓魂之塔」は、第二次大戦中に群馬県から満州・蒙古への開拓に赴き犠牲となった物故者を合祀するため、昭和49年9月、この地に建立されました。群馬から満州に渡った開拓移民は「開拓団」と「青少年義勇軍」を合わせ8700人余り、終戦期の犠牲者は1600人を超えるとされています。

戦時中、関東軍により中国東北部に建設された「満州国」へは、国策として多くの移民が送られました。このうち旧勢多郡木瀬村（現前橋市）では集団で移り住む分村移民を決め、昭和14～17年にかけて約160戸、600人が吉林省駅馬村へ入植しました。団長・清水圭太郎氏を中心とする開拓団は現地民との協和も図りながら努力を重ね、終戦間際には一戸あたり13町歩の農地を持ち、開拓地のなかには学校や診療所、製穀場、醸造所、神社までもが作られ、桃源郷と呼ばれるまでに繁栄したそうです。

しかし昭和20年8月、敗戦を迎えると平和だった開拓地は一変。匪賊からの襲撃が始まり、開拓団は土地を離れることを決めます。そこから約1年にわたる逃避行と難民生活の間に、襲撃や飢餓と寒さにより幼い子供を含む多くの命が失われてしまいました。現地で徴兵されていた男性のなかには捕虜として抑留された人もいます。その上、命からがら故郷に帰還した人々を待っていたのは飢餓とインフレ。農地解放により所有していた僅かな土地も人手にわたり、生まれ育った場所ももはや永住の地ではなくなっていました。

そこで、清水団長以下、県内では〈第三の故郷〉を建設するための運動が起こり、その結果、榛名や赤城山麓とともに選ばれたここ浅間山麓の大屋原に駅馬からの引揚者の多くが、またそれに続いて海倫（ハイロン）や甘楽の人々が隣地へと入植（※1）。入植は主に昭和21～24年の3年間に行われ、延べ総数193戸、総面積約1200ヘクタール、うち耕地は約700ヘクタールで各戸20～25アールの宅地が配分されました。

※1 町内にはこのほか群高、アテロ、下小菅などの開拓地がある。

荒れ地から、県内でも有数の酪農・高原野菜の産地へ。

前橋出身の石井二郎さん（92歳）は、二十歳を過ぎたばかりの昭和23年、師と仰いだ加藤完治（※2）の奨めもあり、大屋原に入植しました。「その前年に第一期が入って、俺は二期で入った。当時このあたり一帯はカラマツと熊笹の生い茂る原野。まずはカラマツを倒して柱にして熊笹で屋根をかけた家を作って。焼畑をしてアワやヒエ、大豆、小豆、じゃがいもを作ったが、高冷地だからいくらも採れなかったね。馬を飼って前橋まで田植えの手伝いにいったり、大学村に卵を売りにいったり、食べるためにはなんでもしたもんだよ」

北軽井沢入植後もリーダーシップを取っていた清水圭太郎氏のもと、開始後まもない昭和23年には「北軽井沢開拓農業共同組合」を設立（※3）。冷害の影響や、独自に設けた輪作試験地で適性を調べた結果、この土地では酪農が適していると判断し、昭和30年には「村つくり五原則」（※4）を制定。この指針が今に至る開拓地成功の礎となります。

台風や火事などの危機がありながらも、30年代初めには電気も通り、道路整備もスタート。機械化の導入も進み、高原野菜や果樹栽培にも取り組むように。昭和42年には高冷地酪農と高原野菜の営農を確立したとして「朝日農業賞」を、優秀な開拓地を代表して「農政局長賞」を受賞するまでに発展しました。

自らも酪農を経営し、町会議員として道路改良などにも携わってきた石井さん。入植当初を知るいわゆる「開拓一世」は、石井さんを含め今ではごく少数となってしまいました。「今はどの家も大型のトラクターを持っていて、昔のことを思うと夢の国みたいだね。息子や孫の世代ががんばってくれていて、小さい子供たちも増えて賑やかで嬉しいね」

冒頭の「群馬満蒙拓魂之塔」前では毎年9月の最終日曜日、群馬県拓友協会と満蒙拓魂之塔奉賛会による「拓魂祭」が実施されます。満蒙拓魂之塔奉賛会の会長を石井さんから引き継いだ、大屋原で酪農を営む真下豊さんは、「われわれ開拓二世もここにある拓魂之塔を誇りと共に守り、開拓時代の記憶を次の世代へと伝え残していかなければならない」と話します。

レタスやキャベツ畑が広がる現在の大屋原

※2 加藤完治
教育者、農本主義者で、東宮鉄男などとともに満蒙開拓移民を推進。満蒙開拓青少年義勇軍の設立にも関わった。

※3「北軽井沢開拓農業共同組合」
開拓農協組織のうち県下では唯一存続し、昭和48年、総合農協に転換した。

※4「村つくり五原則」
《①草をつくり（草地農法）、②牛をつくり（酪農）、③土をつくり（地力増進）、④村をつくり（庶民皆和）、⑤人をつくる（人間研成）》

◎今回紹介したのは…
群馬満蒙拓魂之塔

参考資料：
「長野原町誌」、「希望に満ちた満蒙開拓と終戦～群馬満蒙拓魂之塔建立三十周年記念誌」（2004年発行）、「五十回忌法要記念 三太郎松」（平成6年発行）

乳搾りをする石井二郎さん。家畜は牛のほかに、馬、豚、鶏などがいた。「鶏（卵）が日銭で、牛（乳）が月給、豚（肉）が半年の銭になった」という。馬は農耕のほか、移動の際の馬車に使った。

開拓地の光景

石井二郎さんよりお借りした写真で、
開拓地の風景を振り返ってみましょう。

酪農が本格化して以降のサイロづくりの様子。近隣の人々で協力して、サイロも自分たちで作った。

入植後まもない頃の大屋原の風景。屋根に使われているのはススキではなく熊笹。当初は水道も電気もなく、住居や畜舎も共同だった。

昭和44年、牛乳日量10000キロ突破の記念写真。背景にあるのは「北軽井沢開拓農業協同組合」事務所。北軽開拓農協ではいち早く酪農技術を取り入れ、昭和26年には簡易ミルクプラントを建造し、「スズラン牛乳」の名前で販売を開始した。

ふるさと再発見

[29]
—文化財だより—

【堂岩の天狗】

国道145号線沿の横壁地区の中村から、道の駅（やんばふるさと館）に向かう道筋から前方の山をみると、新緑の木々の間からゴツゴツした岩肌が縦に幾重にもかさなっている。

その岩肌の中程にお堂の形に似た岩がある。対岸の林地区からは、屏風のように切り立ったお堂が夕日に映えて美しい。そこには天狗が住んでいたという。「堂岩の椀かし」という伝説が残っている。

横壁の堂岩のお天狗さんに、林の神官浦野家からお膳やお椀を貸してくれるようお願いする話である。

浦野家では、大勢のお客振る舞いの時などに、膳椀がたくさん必要になる。手持ちの膳椀では足りなくなるので、堂岩に住む天狗に申し入れて必要な膳椀を用意させたという。

堂岩の天狗は、申し入れがあると必要な膳椀を用意して翼をつらねて捧げ持ってくる。客が去ると空の膳椀を持ち去ったそうである。

ある時不思議に思ったお手伝いさんが、天狗の正体を見定めようと縁側に返して置いた椀膳を障子の中から覗き見していた。それを察した天狗は姿をあらわさなかった。それ以後は何としても、貸してくれなかったという。

同じような膳椀貸し伝説は、長野原の琴橋にも残っている。

次回は【仁王像】を紹介します。

（上）遠景（下）近景